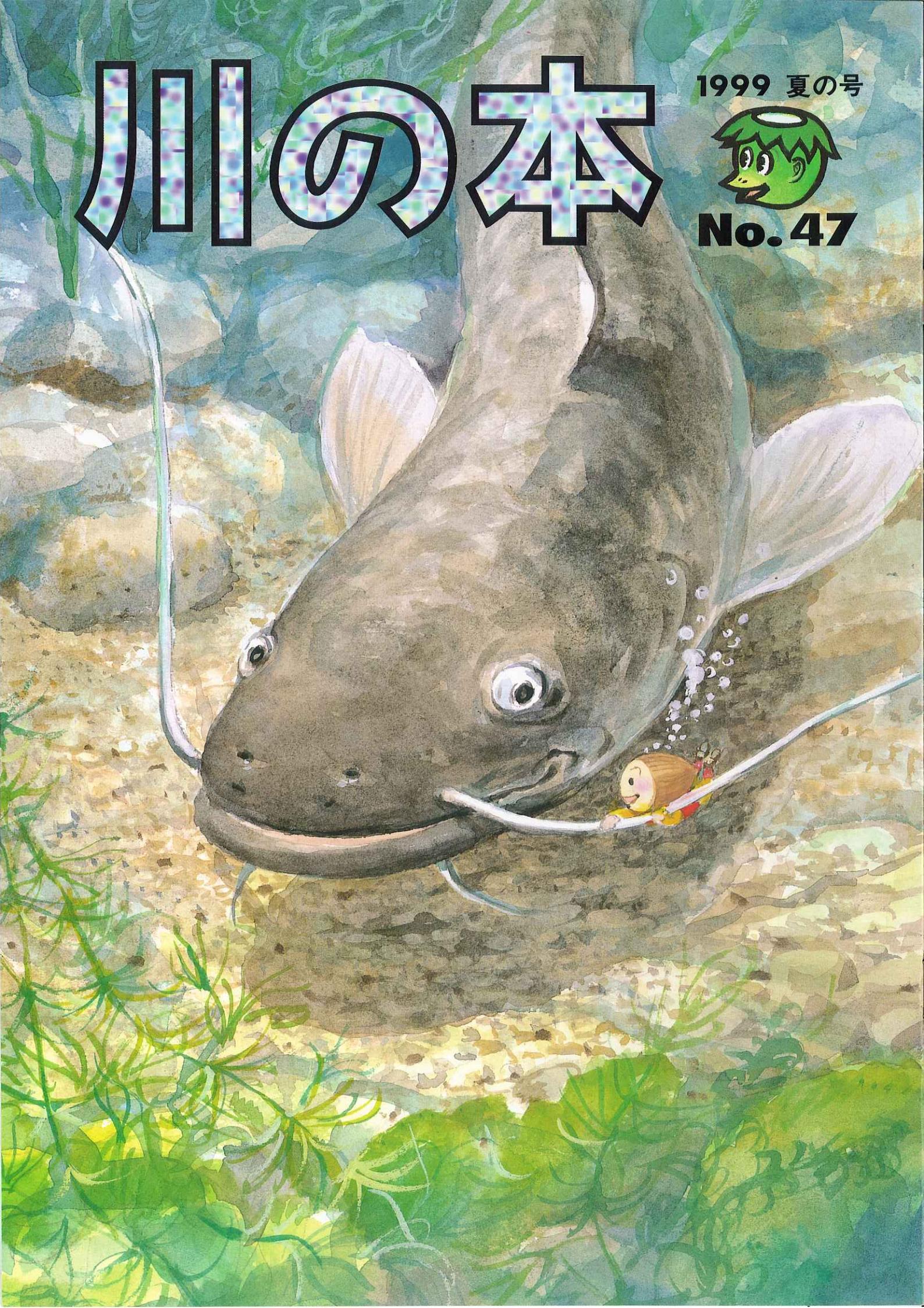


川の本

1999 夏の号



No. 47



たぬきの紙すき

(高知県吾川郡
伝説、再話)



四国の土佐といえば、むかしから和紙づくりで有名なところじや。紙づくりにはきれいな水が欠かせない。土佐には、仁淀川が流れておつてな、きれいな水がたっぷりと流れている。上流でとれるコウゾという木の枝の皮を舟で運んでき、これを原料にして下流の村で紙を書いておつた。どの紙よりも薄くて丈夫なのがじまんでな、つくりかたは、何百年もむかしからひみつにされておつて、ひみつをもらしたものは殺されるほどじやつた。

さて、三百年ほどもむかしのことじやが、紙書きの里として知られた成山村の新助が、加田村の伊五六じいさんの家に養子にきた。そのときも成山の庄屋どんに、新助は「けつして紙書きのひみつはもらしません」という証文をかかされだし、加田の庄屋どんも「ぜつたい紙書きのひみつをきだしたりはしません」という証文をかかされたほどじやから、いくら近くの村でも紙のつくりかたを知る者など、一人としておらなんだ。

ところが、ある日のこと、伊五六じいさんが、へんなうわさをきいてきた。「新助や、中タン竹やぶでな、夜になるとタヌキがあつまつて紙書きしよるらしい、まい晩じやそつな」

「じいさまや、この村で紙書きのしかたを知つておるのはおらだけだ。それに、おらは誰にもおしえていなしな、ましてタヌキなんぞに紙書きができるわけがない」

「しかし、ほんとうしいぞ。うそじやと思うなら、たしかめにいつたらどうじや」

そこで、新助は中タン竹やぶに、たしかめに行くことにした。

「どうせ間抜けなタヌキが、おらたち人間をだまそそうとしとるのじやろう。ひとつ、しつぽをつかまえてこらしめてやるわい」

加田村には大きな竹やぶが二つあって、仁淀川ぞいの竹やぶを、外やぶといい、村の中の竹やぶを、中タン竹やぶと呼んでおつた。

どちらも洪水のとき水の勢いを弱めるためのものじやから大きな竹やぶでな、昼夜でも薄暗くてさみしいところじやつた。

夜になつて、新助は伊五六じいさんといつしょに、こわごわと中タン竹やぶの奥へ入つていつた。しばらくいくと、タタン、タタンと音が聞こえてきた。わずかな月あかりに目をこらして見ると、村人と同じようなかつこうをしたやつらが何人かあつまつて、紙書きをしているではないか。伊五六じいさんは新助にそつとささやいた。

「うわさどりじや、それにしてもタヌキのやつ、うまく化けたもんじゃな。しかしタヌキは自分のことを〈おら〉とはいえず、〈うら〉としかいえないから、はなしかければ、すぐ化けの皮がはがれるはずじや」
新助はどうぞくしながらも、仲間のような顔をして近づいていった。そして手伝ふりをしながらどこかにしつぽがでてないか、かんさつをしたがどこにもしつぽは出でおらん。みんなまじめ顔で、紙の原料のコウズの皮をたたいたり、川の水にさらしたりしちよる。ところが、どいつもこいつも、ぶきつちよな手つきで、なつちよらん。見ているうちに新助はおもわずわらいだしてしまった。

「ははは、こりやだめじや、なつちよらん」
びっくりしてみんなは手を止めたが、その中のぎよろ目の男が、「どこがなつちよらんのじや。紙すきのしかたも知らんくせに」と、ぎよろ目をみひらいた。そういわれては新助もだまつてはおれん。
「成山の紙すきは、こうやるんじや、よう見とれ」

そういうがはやいか、ぎよろ目の男がもつていたぼうをとりあげると、トントン、トンツと、コウズの皮をたたいて見せて、「いいか、良い紙をつくるにはな、コウズの枝を蒸して皮をはがし、アケでしつかり煮て皮をやらかくしたら、川の水でさらし白くする、つぎにくさうちというて、厚い板の上で、トントン、ぼうでたたいて纖維にする。細い纖維になつたら、こんなふうにして水にといて纖維をからませる。のりのようなネリをとかした水に平らにのばして紙をつく。どうじやい、わかつたか」みんなは、目をまんまるにしてかんしんした。そしてすぐ、新助のいつたとおりに、紙づくりに精をだしはじめた。みんなの中には、きれいな娘もおつてな、

「ここはどうすりやいいのですかいの」と
などと聞いてきよる。

いつのまにか新助は、成山の紙すきのひみつをぜんぶおしえてしまつたんじや。「あんた、たいしたもんじや。なかまに入つてくれや」と
ぎよろ目の男がすすみてて新助にたのんだ。新助はあわてた。

「しまつた。ひみつをおしえてしまつた。しかし、あいてはタヌキじや、人間にほげんにはおしえちよらん」
そうおもつたが、しんぱいになつて問うてみた。



「おんしゃや、だれなら」

その返事に、新助はなんがなんだかわからなくなつた。しつぽはないし、〈おら〉とも〈うら〉ともいうし、すっかりタヌキにだまされたような気持ちになつて、ふらふらと家にかえつてきた。

それから、またたく間に加田の村じゅうに紙すきがひろがつた。これを知った成山の庄屋さんは、かんかんにおこつて、加田の庄屋さんの家のへどなりこんできた。

「おぬし、わしとの約束をうらぎつて、新助から紙すきのひみつをききだしたな」

しかし、加田の庄屋さんは、すました顔でこたえたそうじや。「いやいや、わしら新助からは、なんもきいちよらん、タヌキにおそわったたちが、まい晩おしえとるのよ」

成山の庄屋さんは、なにやらタヌキにだまされたような気持ちじやつたが、頭の中がこんがらがつてしまつて、首をかしげかしげ、かえつていったそ



こうちけん
高知県



仁淀川は和紙の川

昔から、人々のくらしは、川と深く結びついています。このお話をでも紙すきをとおして、仁淀川と結び付いた人々のくらしが、おおらかに語られています。

土佐の和紙は、美濃の紙や越前の紙、石州の紙などとともに日本の代表的な和紙で、それぞれに独自のすぐれた特徴をもっています。こうした紙の製法は、昔はよその地に、もれないよう祕密にされていたようです。土佐の紙づくりも土佐藩がきびしく保護していました。

話では、命をかけて紙づくりを大切に育て、必死に守り伝えてきた人々のくらしを、うかがい知ることができます。その反面、戸時代、土佐藩御用紙すきの家に生まれた吉井源太という人は、和紙づくりの技術向上に努力し、私利をかえりみず広く和紙づくりの普及につとめています。

このように、きびしさの中にも、いかにも南国土佐らしいおおらかさが、タヌキが登場するといった、とぼけた明るいお話を生んだのかかもしれません。

仁淀川は、西日本一の高さをもつ石鎚山から流れだし、高知市の西で太平洋にそそぐ124キロメートルの長さの川です。流域面積は1560平方キロメートルあります。ですが、その95%が山地です。つまり、仁淀川ぞいには平野部が少なく耕地も少ないのです。じゆうぶんな土地を持てない農民たちの知恵が、川を利用した紙すきを発達させたのでしよう。

現在でも仁淀川ぞいの伊野町は和紙の里として、りっぱな紙の博物館もあり、土佐和紙の伝統をまもり普及にも貢献しています。仁淀川は、人々のくらしとしっかりと結びつき、地域の文化を育て、いまも日本有数の清流を失うことなく流れる美しい川なのです。

伝統工芸（木工）と川の水

日本には、椀、木鉢、盆、それに指物（箱、机、たんす、芸）がある。といった木を組あわせてつくる器物など、すぐれた木工芸がある。

ところで、その伝統的な木工芸が川の水と深いかかわりがあることをご存じだろうか。むかしは、木は山からいきだに組まれて川をくだり、下流の本場（材木を保管する場）で充分に水につけられた。その間に、木のなかの水溶けの樹脂が溶け出る。このようにして樹脂が抜けた木は、後々、狂いが少なく、カビなどもつきにくくなる。

伝統工芸に用いられる木（素地）は、ことさら念入りに水につけられアクリ抜き（樹脂抜き）をして使われる。

作業場の溜め池に、小川の水や湧き水などをひいて、そこにケヤキやトチの木の荒挽きしたものを沈めて充分にアクリ抜き、次に乾燥室の棚に積んで、下から木くずを燃やし、その煙で煙煙乾燥をして余分な水分も抜く。このような手順を経て、やっとロクロにかけられ作られた椀や木鉢はひび割れたり変形したりしなくなる。緻密な作業をする指物も、材料となる板が命だ。川の水や雨水を利用してアクリ抜いた板を使う。

このように伝統的な木工芸には、水は欠かすことはできない。あたたかいお味噌汁が入ったお椀を手にしたとき、そのお椀ひとつにも、川の恵みが生きていることを、ちょっと思いおこしてほしいのだ。



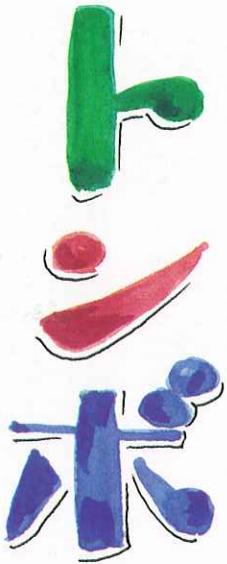


トントボは昆虫の中でも人気のですが、ギンヤンマ、シオカラトンボのほかに、日本には1900種以上のトンボがあります。これらのトンボは幼虫のときはヤゴといつて水のなかでくらしています。

秋、トンボのたまごは、水中の水草の茎にうみつけられます。そして、たまごのまま冬をこします。春、たまごからかえり、ヤゴ（幼虫）になつても水のなかでくらします。ヤゴはさなぎにならず、夏、水からでて、うかをして、トンボになります。

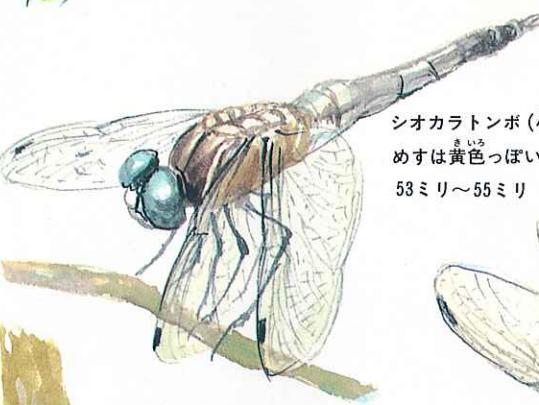
ほかの昆虫のように幼虫からさなぎにならないので「ふかんせんへんたいの昆虫」といいます。

むかしにくらべ池や沼・小川など、トンボが育つのよい環境が少くなくなっています。トンボの数もへつていて、昆虫採集以外で、むやみにトンボをとるのはかわいそうだ。とつてもなるべく逃してあげね。



シオカラトンボ（小川、池）
めすは黄色っぽい茶色
53ミリ～55ミリ

トンボの目は、(ふくがん)と(たんがん)のりょうほうをもっています。ふくがんは5万こもの小さい目があつたるもので、どちらの方向もよくみえます。



オニヤンマ（谷川）
やく95～100ミリ



ギンヤンマのうか
昆虫が、さいごのだっぴ（かわぬぎ）をして成虫になることをうかといいます。

ヤゴはうかがちかづくと
水中から出て水草をはいあがり、じっとしています。
やがて、ヤゴのさいごのかわぬぎ
がはじまり、トンボがあらわれます。

たまごをうむ、ギンヤンマ、(小川、池、ぬま)
やく70ミリ

つながって
卵をうむ ヤンマ



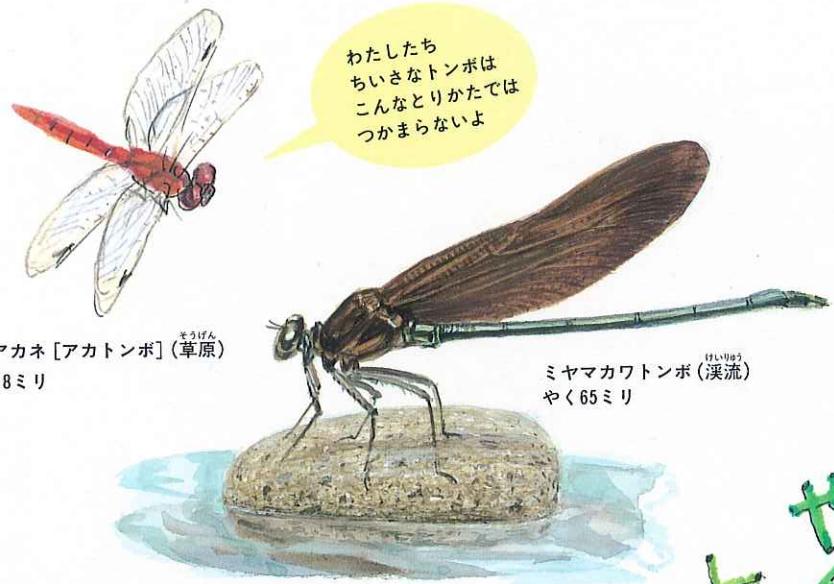
ヤゴの赤ちゃん

ギンヤンマのおすは、めすのくびのところに尾をはさんで、つながってとぶことがあります。

ギンヤンマのめすは、つながったときだけ、たまごをうむことができます。つながったまま、水中の水草にたまごをうみつけます。

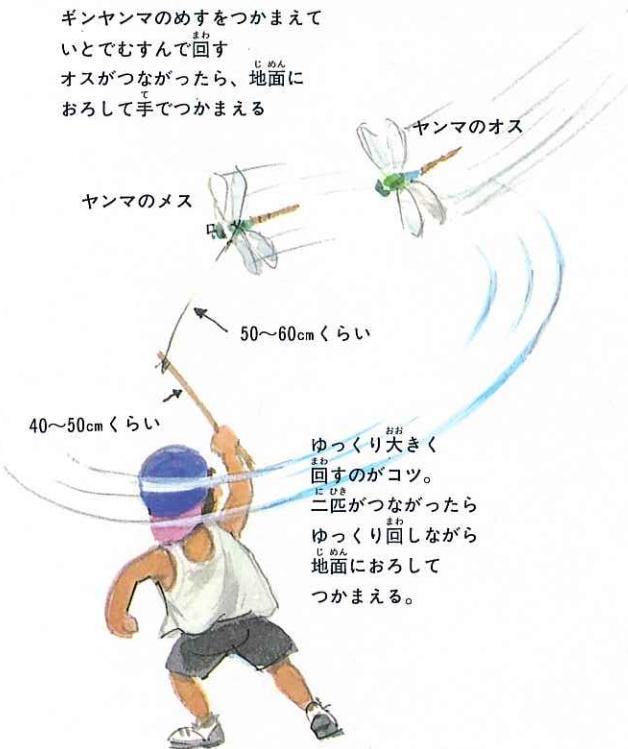


川へ行くとき これだけは守ってほしい
・一人ではぜつたい行かない。・友達とでかけるときも大人の人といっしょに行く。・人のいないところでは遊ばない。・行先はかならずいって行く。・人のいるところで石をなげない。・おやつやおべんとうのあとかたづけはきちんとし、ぜつたいちらかさない。
・切れた釣り糸なども捨てないでもちかえる。

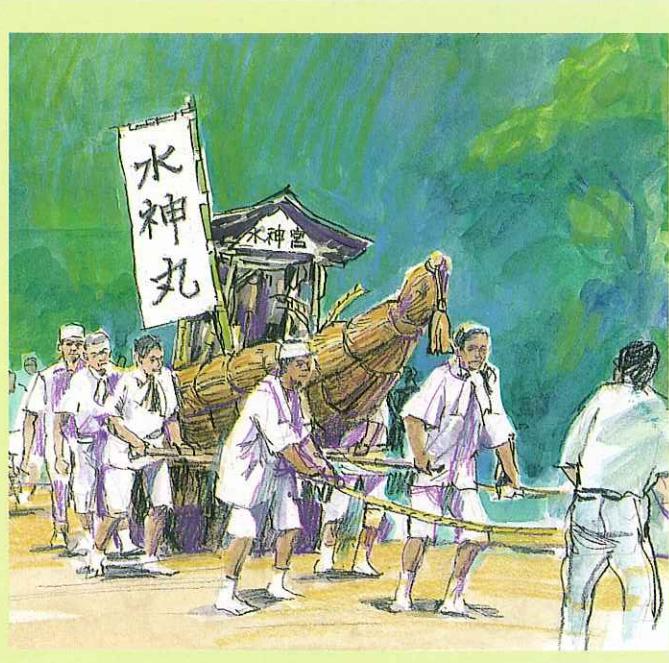
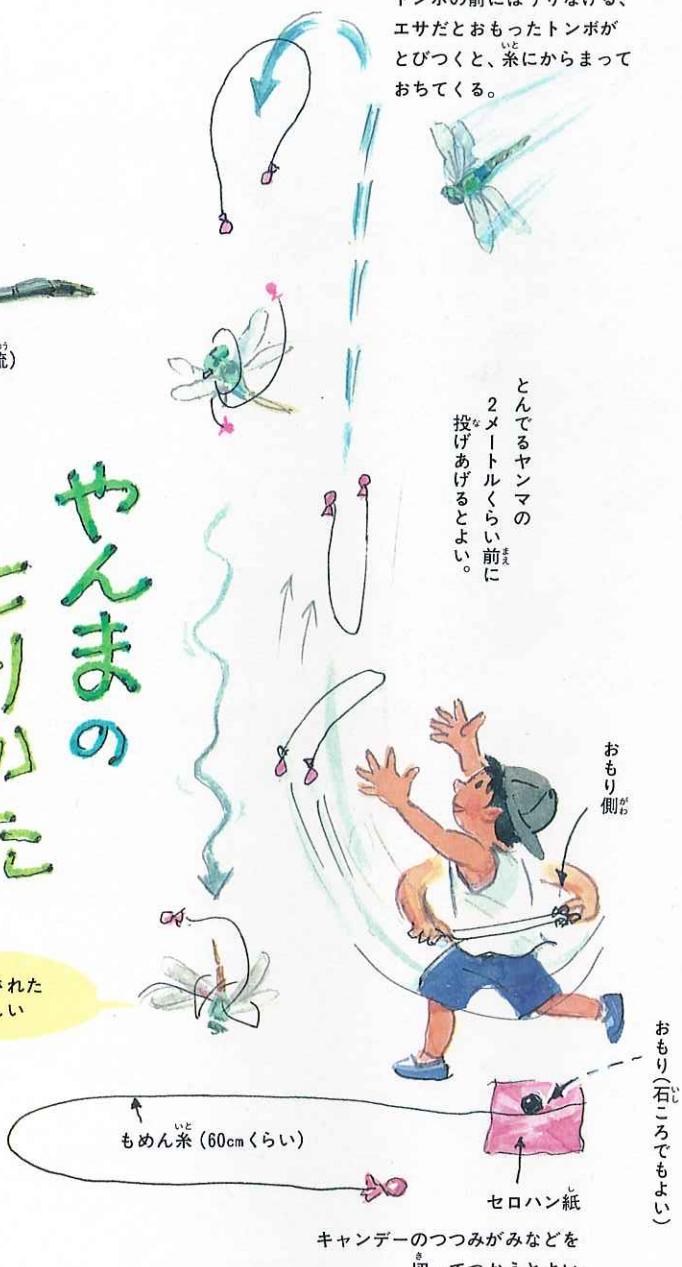


トンボの前にほうりなげる、
エサだとおもったトンボが
とびつくと、糸にからまって
おちてくる。

やんまの とりかた



だまされた
くやしい



川の伝行事

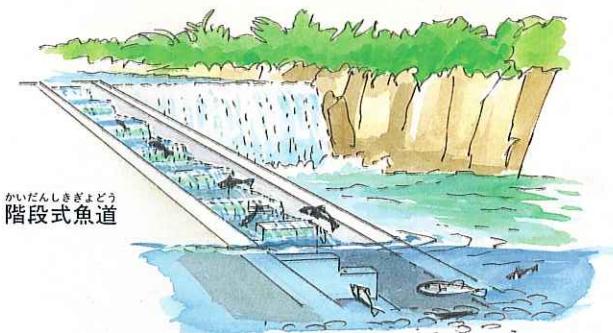
水神祭 麦わら舟 (群馬県伊勢崎市)

毎年七月二十五日に行われる水難除けを願う祭りです。この祭りがこの玉村町五料の地は、利根川に烏川が合流するあたりで、江戸時代から明治初期にかけては、渡し舟が行き交う水陸交通の要所でした。そうしたことから、船頭と漁民の水難除けの祈願と無縁仏や先祖の靈の供養とをかねて水神祭が行われるようになりましたと伝えられています。祭りの前日に、飯玉神社で麦わらと青竹で約7~5メートルの舟を作ります。この手作りの「麦わら舟」が神輿の役をします。当日は夕方から「麦わら舟」をひいて村中をねり歩き、観光用の派手な見せ場などはありませんが、地域に根差した、素朴な水神信仰の伝行事として、大切に受けつがれてきた貴重なお祭りです。

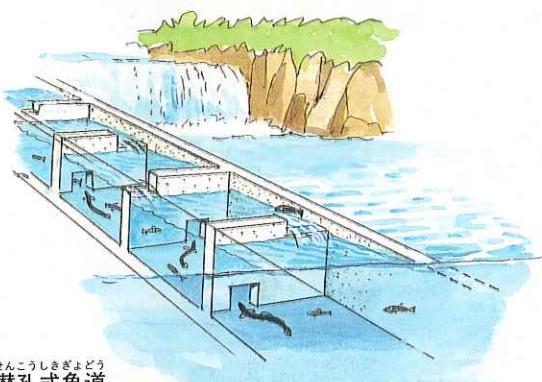
ぎょどう 魚道ってどんな道

魚には、回遊魚といって、一生のうちに川をさかのぼる上ったり、海へ下ったり、長い距離を移動する魚があります。例えば、アユ、サケ、サツキマスなどです。

ところが、川にはセキやダム、落差工など、川の流れをさえぎるような施設があります。このような施設は「横断構造物」といわれていますが、農業の水をとりこんだり、洪水によって土砂が急に流れ出すのを防いだりする大切な施切です。



階段式魚道



潜孔式魚道

しかし魚が川をさかのぼるのには、じゃまになる施設です。もし魚が移動できなくなると回遊魚などは生きていけません。それでは困るので「横断構造物」には魚が通りやすいように魚の専用水路が設けられています。

この魚の専用水路を「魚道」といいます。回遊魚だけでなく、いろいろな魚が川をさかのぼりやすくするために、最近では研究がすすみ、いろんな形の魚道がつくられるようになりました。



いろんな魚が
川をのぼれるようにと
いろんな魚道が研究
されているんだ



緩勾配バイパス水路

河川愛護月間

7月1日→31日

8月1日は水の日です

河川環境管理財団は

みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- *よりよい水辺のプランニング
- *楽しく安全に遊べる川づくり
- *川をきれいに、川を愛する心を育ぐくむ運動
- *未来の水辺を考えた調査や研究
- *せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修 建設省河川局

財團法人 河川環境管理財団

Foundation of River & Watershed Environment Management
(〒104-0042) 東京都中央区入船1丁目9番12号
TEL.(03)3297-2600(代表)